市立函館病院、春のロビーコンサートに参加して

函館市医師会
（市立函館恵山病院）　水関　清

市立函館病院ロビーコンサートは、「休日の病院ロビーを、ひと時のやすらぎの場に」の目標のもとではじめられ、回を重ねた今回（第11回）は、「チェロ＆ピアノスプリングコンサート」と題して、早春の穏やかな午後に開催された。演奏者は、当院で昨春から初期臨床研修をはじめられた研修医のおふたりで、中田麻子さんがチェロ、井上万梨絵さんがピアノを担当された。演奏終了後のアンコールには、もうひとりの研修医、藤井理美さんのフルートも加わり、和やかに行われた（演奏曲目は表参照）。

頭上からアトリウムに射し込む陽光は明るく、チェロの音が、やわらかな室内の光にからまりながらたゆたう。弾みながらも時に鋭く響くピアノの音色が、これに交錯する。チェロを演奏した女史は9歳から、ピアノの女史は５歳から、それぞれの楽器の演奏をはじめられた由。医師となって働き始めるまでに、おふたりがチェロとピアノの練習に注ぎこまれた時間。そして、多忙な研修生活を割いて、この日のために暮夜ひそかに練習された時間のことを想う。

チェロとピアノというふたつの楽器を自在に奏で、ひとびとにその音色を楽しんでもらえるようになるまでに費やした時間。その時間の堆積の上に、研修生活から工面してつくりだされた今回の演奏のための練習時間が積み上げられる。そのようにしてさまざまなかたちで積み重ねられた時間が源となり、水源からせせらぎが流れ出すように、手にする楽器から音がこぼれ出して、患者様や病院職員をひと時の安らぎに導く。水源に湛えられた水が多ければ多いほど、せせらぎの流れは安定し、そのほとりでひとびとは憩えるのであろう。

誰が見てもわれをなつかしくなるごとき
長き手紙を書きたき夕　（啄木）

多忙な研修生活の中でおふたりがしたためられた演奏という名の手紙は、しっかりとみんなのもとにとどけられた。患者様にはいたわりの手紙として、そして病院職員には一年間の研修のお礼の手紙として。

演奏曲目をあらためてたどってみると、おふたりが選曲にこめられた願いを垣間見ることができる。軽快なメヌエットは、現在の仕事に就いたばかりの頃のうきうきした気分を、ジュトゥヴは、医学へのあこがれを、からたちの花は、仕事の困難さの自覚を、早春賦は前途にひらける希望を、それぞれ意味するのであろうか。この道と上を向いて歩こうは、研修から得た初々しい自信を、アンコール曲・故郷の意味するところは、いわずもがなであろう。あらためて、眼前に展開するミニコンサートに結実した、人と人との出逢いの縁の不思議をも想う。

演奏曲目

メヌエット　（作曲　ベートーベン）
ユモレスク
（作曲　ドヴォルザーク、編曲　クライスラー）
ジュトゥヴ　（作曲　サティ）
白鳥　（作曲　サンサーンス）
リベル・タンゴ　（作曲　ピアソラ）
ロンドンデリーの歌（作曲　グレインジャー）
からたちの花
（作曲　山田耕筰、作詞　北原白秋）
早春賦　（作曲　中田章、作詞　吉丸一昌）
浜辺の歌　（作曲　成田為三、作詞　林古径）
椰子の実（作曲　大中寅二、作詞　島崎藤村）
この道　（作曲　山田耕筰、作詞　北原白秋）
上を向いて歩こう
（作曲　中村八大、作詞　永六輔）
故郷　（作曲　岡野貞一、作詞　高野辰之）

燈燈無尽、という言葉を知ったのは、筆者がはじめてのへき地診療所勤務を終えた頃であった。ひとは、ひとから教えられ、みずから学び、そして時を経て、ひとに伝え、教えていく。戊辰戦争の傷病者治療に尽くした高松凌雲に淵源を持つ市立函館病院。ここに研修の場を求めたおふたりのともされた学燈も、これまでともされた学燈とならんで、とぎれることなく輝き続けていくことを祈りたい。

演奏風景

自然破壊と生活圏の移動

札幌市医師会　門脇　純一

最近の気候の異常さは、まったく強烈である。驚き、あきれてもいる。過去のものと、大きく差を開けている。地域的ではあるが、猛暑、寒冷、豪雨、寡雨、地震、台風、竜巻などの出現頻度が高いだけでなく、猛烈なのである。人の命を奪う頻度も決して少なくない。

そのような感じ方を口にする人が多い。地球レベルの異常の始まりを示唆する雄叫びと評する人もいる。このことは、恐怖心に似て、連鎖しているようにも受けられることがある。

その原因は不詳ながら、エルニーニョ、地球の炭酸ガス濃度、地球環境の異常などと関連しているとの考えが強い。

このことが、動物の生活圏を変化させ、人間の生活圏に押し迫ってきている現実がある。なんといっても、どう猛な動物が人間や、家畜の命に関与する被害が、最初に話題にのぼる。

北海道では、熊が、農作物あらしに、ごみのなかの食物あさりに出没するようになり、小・中学校庭に姿を現すようになると、ただごとでなくなってしまう。このことが、ひぐまだけでなく、月の輪ぐままでとなると、本州に及ぶ広範な地域の現象となっている。

今年はいのししの年にあたるが、それを知ってか？わがもの顔に、民家の近くに現れたり、四国の宇和島東高校では校庭に入ってきて、校庭の壁の網に激突した姿も、テレビで紹介された。昔から、猪突猛進とは、よく聞いていたことだが。

猪は怖いものをみると、パニックになり、猛進してきたり、噛んだりするそうである。猪のパニック症候群も要注意である。噛む力は、成人の1.5倍といわれる。平和で幸せな、いのしし年であるためにも、協力願いたいものである。

日本猿は強烈な危害というほどのものではないとしても、威嚇するときの表情をみるかぎり、やはり恐ろしいものである。この日本猿がこともあろうに、福岡の繁華街に出現したそうである。この猿の北限界は、下北半島とされているが、最近どんどん増えてきて、農産物に大きな被害をもたらしているそうだ。

この猿、天然記念物として指定をうけていることで、甚大な被害があっても減少させる策に手を出せず難題となっている。

これから、共存か、競存か、人間の世界にもみられそうな課題に直面している。住民のなかには、そのうち猿にのっとられるという笑えない笑い話になっている。

烏が、人間の生活圏に入りこんできて話題になってから長くなる。この鳥、小鳥の出産時に、こどもの保護のため攻撃的になること、ごみあさりの名手で近辺を散らかすことで人には好まれていない。

ズルを感じさせる賢さ、真っ黒でくるくるよく動く目なども、好感をもたれてない。

ここ数年来、札幌中心部の空を飛び交うかもめが急増しているそうである（日本野鳥の

会)。種類はおおせぐろかもめといって、翼をひろげると約1.4m。現在百羽以上、市街地に入りこんでるそうだ。中央区のビルに営巣しているという。豊平川の魚を食べ、道庁前庭・中島公園の池、モエレ沼も鳥の食卓になっている。

おじろ鷲は知床でみれる鳥とばかり思っていたが、ごく最近、札幌の豊平川で寿命をまっとうした鮭を餌にした画像をみた。その近辺に烏が飛来しておこぼれ頂戴の姿があった。

ふくろうが、都会の街路樹に、鹿がコンクリート路上をあるいてる姿をみるにつけ、この自然界の変化、動物の生活圏の変容は、将来に向け何らかの信号を発しているのか、暗示的でもある。

道医の動き

3月11日　第127回定時代議員会(10日～)、平成19年定時総会、日医代議員打合せ会
3月12日　三役会
3月13日　第25回常任理事会、広報委員会、学術部担当理事会、北海道介護保険課との打合せ、
3月14日　日医社会保険診療報酬検討委員会(榊山常任理事)、日医救急災害医療対策委員会(目黒常任理事)、日医会員の倫理・資質向上委員会第1分科会(上埜理事)、日医医師会共同利用施設検討委員会(山理事)
3月15日　産業保健活動推進委員会、日医広報委員会(長瀬副会長)、日医学校保健委員会(三戸常任理事)、日医介護保険委員会(原田常任理事)、都道府県医師会広報担当理事連絡協議会(長瀬副会長、藤井常任理事)、都道府県医師会介護保険担当理事連絡協議会(原田・榊山各常任理事)
3月16日　日医医療関係者対策委員会(三宅常任理事)、日医病院委員会(北野常任理事)、日医生涯教育推進委員会(渡辺常任理事)、都道府県医師会生涯教育担当理事連絡協議会(渡辺常任理事)
3月17日　学校保健推進委員会、保育所嘱託医・幼稚園医活動推進委員会、学校心臓検診推進委員会、労災・自賠責保険医療等改善対策委員会
3月19日　三役会、北海道医師会・北海道小児科医会打合せ
3月20日　産業医活動促進対策事業に関する打合せ(釧路市、小山・北野各常任理事)、日医理事会(飯塚会長)
3月22日　母体保護法指定医審査委員会、北海道健康づくり実行委員会、都道府県医師会情報システム担当理事連絡協議会(藤井常任理事、髙村委員)、日医IT化推進検討委員会(髙村委員)
3月23日　日医医事法関係検討委員会(赤倉副会長)
3月24日　日医医師国試問題作成講習会(MCQ)講習会(渡辺常任理事)
3月26日　三役会、健康スポーツ医学推進委員会
3月27日　第26回常任理事会
3月28日　医事紛争処理委員会、日医国民生活安全対策委員会(増田理事)
3月29日　救急・災害医療に関する講演会
3月31日　北海道ブロック選出日医代議員打合会(飯塚会長、長瀬副会長、三宅・宮本各常任理事ほか)
4月 1日　第116回日医定例代議員会(長瀬会長、三宅・宮本・畑各副会長、飯塚顧問ほか)、第64回日医定例総会
4月 2日　三役会
4月 6日　第27回日本医学会総会(～8日、大阪市、長瀬会長ほか)
4月 9日　三役会
4月10日　第1回常任理事会、指定時講習会、医療政策部担当理事会